（論　文）

# ローマ共和政における政治問題としての海賊（2）

## ―ミトリダテースと海賊問題―

宮　嵜　麻　子

**キーワード**

ローマ共和政　　帝国　　地中海世界　　ミトリダテース戦争　　海賊　　命令権

### はじめに

本稿は「ローマ共和政における政治問題としての海賊（１）―前２世紀末の状況―」（『国際経営・文化研究』2014）の続稿である。著者は前稿において、ローマ共和政期の海賊問題の政治性とはどういう意味であるのかという点について、前２世紀の状況から引き出せるいくつかの可能性を提示した。簡単に振り返っておくとそれは、①ローマが海外進出の正当性の要素として海賊討伐を利用したという意味での政治性（それは時に対立し合う現地諸勢力の一方が他方を「海賊」と呼んでローマの救援を求めたという状況も伴う）、②アントニウス家のように、海賊討伐のために異例の命令権を獲得し、海賊討伐に一定の成果を挙げることで政治的声望を得ることを目指したという意味での政治性、③海賊問題が――たとえば前２世紀半ばの第三次ポエニ戦争やヒスパニア戦争、あるいは前２世紀末のキンブリ、テウトネス族の襲来のように――ローマの政治体制になんらかの意味で危機的状況をもたらしたという意味での政治性である。以上の３点のうち近年特に①がDe Souzaらによってローマ帝国形成過程を解明する重要な要素として取り上げられてきた[1]。たしかに前２世紀の東地中海海賊問題へのローマの対応全般には、直接ローマ船ないしローマ人が略奪されたのではないのに、現地からの「要請」に応えて海賊討伐に乗り出すローマ側の姿勢が見て取れ、①の意味で海賊問題を政治的と捉える見解には一定の説得力がある。しかしまた、前２世紀末に東地中海で猖獗を極めたと言われるキリキア海賊の討伐にローマが着手する段階においても、それを理由に東地中海において属州を形成しながらもなおそこには現地諸勢力の統治体制への配慮が見られ、積極的な東地中海への進出に乗り出していたとは言えないことも前稿において明らかとなった[2]。他方、前２世紀半ば以降ローマ社会に深刻な動揺をもたらした（あるいはもたらしかねない）危機的状況の際にスキーピオ＝アエミリアーヌスP. Cornelius Scipio AemilianusやマリウスC. Mariusに異例の命令権が与えられてきたという事情を考慮に入れると、②で挙げたようにアントニウスM. Antoniusが異例の命令権を付与されて海賊討伐に着手し、そのことによって声望を上げたことも、結局のところそれだけの危機的状況があったればこそと考えるのが妥当であり、したがって③の可能性についてのさらなる検討が必要となる。

**みやざき　あさこ：**淑徳大学　国際コミュニケーション学部　教授

しかし前稿で扱った前２世紀末の状況については史料があまりに乏しく、これ以上の具体的な情報を得ることはできない。これに対して前１世紀に入ると、相対的に海賊問題を扱う史料の量が増えてくる。それらの史料はほとんど例外なく前67年にポンペイウスCn. Pompeiusが異例の命令権を得て海賊の討伐に乗り出したことによって、地中海における海賊問題は一応の決着を見たとする[3]。従って史料のこの量的な豊かさは特に前１世紀のほぼ前半全体に広がっていると言ってよい。しかし当該時期に関する史料の特徴は量的なものだけではなく、質的なものでもあるようだ。それはまず前１世紀前半に関しては前２世紀とは異なり、海賊がローマ船やローマ人を攻撃したという報告や、あるいは海賊の略奪行為によってローマ人の、それも時によっては都市ローマ住民の生活が困難に陥ったという報告など、海賊とローマ人との直接的な関わりが扱われるようになるという点であり、次にそれらの多くは当時のローマ社会に様々な次元で深刻な影響をもたらしたと考えられるいくつかの政治的事件と結びつけて史料中に報告されているという点である。そしてこうした事情を背景に、この時期の関連諸史料では元老院や政務官、ローマ住民、あるいは特定の人物の言動が、前２世紀末までに比較してはるかに具体的に描かれている。こうした文献史料を用いることによって、前稿で提示したローマ共和政における海賊問題の政治性についてさらなる検討を加えることが本稿の目的である。すなわち前１世紀前半における海賊問題を文献史料はいかなる性質のものとして扱っているのか。またそこに示される状況は前稿で確認しえた前２世紀末の状況とは異なるのかそうでないのか。そして特に前102年にアントニウスに与えられた異例の命令権を想起させる命令権が前１世紀前半に再び現れてくることをどう理解すべきなのか。以上が本稿の検討課題である。

ところで上述の通り前１世紀前半の海賊問題は、その多くが当時のローマ社会に影を落としていたいくつかのできごとと関連して史料の中で取り上げられていることが多い。従って当然それらのできごとがローマに及ぼした影響を検討しつつ海賊問題を論じる必要があろう。それらのできごととはまず東地中海において前１世紀前半を通してローマの対外進出を阻害し続けたポントゥス王ミトリダテースMithridatesとの対立であり、次いで属州ヒスパーニアで起きたセルトリウスの反乱（前81 ～ 74年）などの西地中海でのさまざまな不穏な動向であり、そしてその両方と関連すると考えられる当該時期のローマ住民を脅かした食糧不足の問題である[4]。海賊問題と結びつけられるこれらの三つのできごとを軸に、それぞれの状況における海賊問題とそれへのローマ側の対応が問われねばならない。

## １．ミトリダテースと海賊

ポントゥス王ミトリダテース六世のローマとの小アジアをめぐる闘争は、第一次ミトリダテース戦争（前89～84年）、第二次ミトリダテース戦争（前83～82年）、第三次ミトリダテース戦争（前74～65年）の三度の戦争に及んだ。この戦い自体が東地中海へのローマの進出にとっていかなる意味を持っているのかを本稿で詳しく論ずることは到底できない[5]。ここではこの戦争と海賊問題
2 との関係のみを考えてみたい。なによりも注目すべきは、ミトリダテース関連の主史料がおしなべてミトリダテースと海賊との間に協力関係があったと述べている点である。

「（ミトリダテースの支配下に置かれた共同体が蒙ったさまざまな被害のひとつとして）あらゆる土地と海への略奪行為[6]。（App. *Mithr.*, 62）」（冒頭括弧内は筆者の補足）

「海賊たちは最初はキリキアから活動を始め、当初危険を承知で人目を避けて行動していた。

しかしミトリダテース戦争の頃には激しい闘志と勇猛さを発揮し、ミトリダテース王のために尽力した[7]。（Plut. *Pomp.,* 24）」

特にミトリダテース戦争に自分の歴史書の第12巻全体をあてたアッピアノスは、第一次ミトリダテース戦争に関して、王と海賊の関係を具体的に説明している。

「ミトリダテースが最初にローマ人と戦争を始め、アシアを征服した時（スッラはギリシアで多忙だった）、彼はアシアを長期に確保できないだろうと信じて、私がすでに述べたようにいろいろな方面から侵攻し、海賊を海上に送り込んだ。初めに彼らは海賊らしく２、３艘の小さなボートでうろつき回って人々を怖れさせたが、戦争が長引くと、数が増えて大きな船舶に乗るようになった。豊かな略奪品に味をしめ、ミトリダテースが敗北して和平を結び、条約を再び結んだ後も行為をやめなかった。戦争のせいでその日々の糧と故郷の土地を奪われ、困難と貧困に陥ったがゆえに、彼らは土地からのかわりに海から収穫を得たのだ。最初は快速船と一段半櫂船で、次に二段櫂船と三段櫂船で小艦隊の周囲を航行した。戦争の将軍のように大海賊の指令のもとに[8]。（App. *Mithr,.* 92）」

このようにミトリダテースに関する主史料が、王の支配域での海賊の跳梁を伝えるのみか、王がその活動を支援していることを明白に述べている。そしてこのコンテクストの中で、ミトリダテースの支援によって拡大した海賊の跳梁が第一次ミトリダテース戦争終結後も継続し、東地中海の現地共同体や都市に対して、また現地におけるローマの支配権に対して攻撃を加えるのみではなく、直接ローマ人に被害をもたらすようになったということをもアッピアノスは伝えている。

「こうして非常に短期間に彼らは数万人に膨れあがった。今や東地中海のみではなくヘラクレスの柱（ジブラルタル海峡：筆者註）までの地中海全体を彼らは支配した。そして海上勤務中のローマの将軍たちやシチリア島沿岸においてシチリア在任中のプラエトルまでに打ち勝った。海上はどこも安全な航行が不可能となり、陸上も商取引に適さなくなった。都市ローマはこの害悪をもっとも直接的に蒙った。ローマに従う者たちも苦しめられたが、ローマ自体の住民はゆゆしい飢餓に悩まされたのである[9]。（App., *Mithr.,* 93）」

以上の史料の伝え方に依拠し、Marótiをはじめとして当時の海賊問題を東地中海の支配権をめぐるローマとミトリダテースとの闘争の構図の中で理解しようとする学説が一般的に受け入れられている[10]。そしてこの説は、同時にこの時期の海賊問題が前２世紀末よりも深刻な状況を東地中海のみならずローマに対してももたらしていたことを認めるのである。

この見解に対してDe Souzaはこの学説の不自然さを指摘し、ミトリダテースと海賊を結びつける諸史料の報告に作為があることを主張する。彼に従えばそれは具体的にはまず主史料が、依拠しているローマ人の著作が示す王への悪意を継承して、王を謂わば海賊と同列に貶める意図をもっているということになる。そしてまた一方で、ポンペイウスによる前66～65年のミトリダテースとの戦いと勝利とを、前年の彼のキリキア海賊討伐とを結びつけることで東地中海に平和を確立したポンペイウスの偉大さを強調しようとする意図も作用したことになる[11]。換言すればDe Souzaが指摘する前者の意図は、前１世紀前半のローマの東地中海進出を正当化するものであり、後者の意図はポンペイウスという特定の政治家に優位をもたらすというものとなろう。いずれの場合も、海

3

賊の存在と行動自体を否定はせぬものの、De Souzaのこの時代における海賊問題の理解は、前２世紀末におけるそれと本質的に変わらないということになる。

ミトリダテースがローマとの闘争の手法として海賊に「自由な手」を与えたというMarótiの主張と、そのようなことはあり得ないというDe Souzaの主張のどちらに説得力があるかは、結局のところミトリダテース勢力下において具体的に海賊がどのような活動を行い、それがどのような被害をもたらし、そして誰がどう対処した（あるいは対処しようとした）のかという点にかかっている。De Souzaは、アッピアノスやプルタルコスといったミトリダテース戦争に関する主史料が、それらが依拠したローマ人著作家たちのミトリダテースに対するネガティブ・プロパガンダないしはポンペイウスについてのポジティブ・プロパガンダを継承しているにすぎないと主張する[12]。たしかにローマ側の史料が、上で引用したごとき事態を海賊とミトリダテースを結びつけることで王の不正義を主張しようとするものであるとして不思議ではない。しかし、そうであるとしても、史料で報告されている個々のできごと自体がねつ造されたものであると疑う根拠はない。かみ砕いて言えば、そのようなできごとから「何が言えるのか」という点についてはローマ側のバイアスが否定できないとしても、そのようなできごとが「あったのかなかったのか」という点については「なかった」と結論せねばならない根拠はない（むろんすべての記述が精確であるというわけではないが）。この見解にしたがってアッピアノスをはじめとする諸史料を用いて、前１世紀前半の海賊として述べられている者達と、彼らへのローマ側の対応がどのようなものであったのかを検討することが本稿の具体的な作業となる。まずは第一次および第二次ミトリダテース戦争の時期にローマ元老院において指導的立場にあり、自ら第一次ミトリダテース戦争の司令官でもあったスッラL. Cornelius Sullaの言動から検討する必要がある。スッラは、ローマとの間に直接的な軍事対決が展開した前89年より前の段階で、ミトリダテースの動向と関わる軍事行動に着手していた。

## ２．カッパドキア問題と海賊

スッラは前97年に法務官職に在任しているので、彼がプラエトル格で東地中海に派遣されたのは翌年の前96年であろうと考えられる。彼の着任の理由はプルタルコスが以下のように述べている。

> 「プラエトル職の後で、彼はカッパドキアに送られた。この遠征の表面上の目的はアリオバルザネスAriobarzanesの復位であった。しかし真の目的はミトリダテースを阻止するということであった。彼はその支配と権力に自身が継承したものと劣らぬ領域を加えんと不断の努力を続け、今やそれに成功しようとしていた[13]。（Plut. *Sull.*, 5-6）」

前２世紀末以降のカッパドキア内部の王位継承争いにミトリダテースとアルメニア王、ビテュニア王、そしてローマがそれぞれ介入し、ミトリダテースの支援するカッパドキアの有力者ゴルディオスに王位を追われてローマに逃げ込んだカッパドキア王アリオバルザネスがローマによって復位
4 されるにいたる経緯についてはここでは詳しく述べない[14]。要点は、カッパドキア問題が明らかに示すミトリダテースの勢力拡大の試みをローマが警戒し、この時期にはこの王のこれ以上の進出を阻止する意思を持っていたということである。そのことがプルタルコスの文章でスッラの着任の「真の目的」として示されている。

さて、この文章によるとスッラの目的地はカッパドキアと読める。しかしアッピアノスはスッラの管轄属州を明確にキリキアと述べている。

「私はキリキアを統治していた時に、アリオバルザネスをカッパドキアに連れ戻した[15]。（App. *Mithr.*, 57）」

De Souzaが指摘するように史料はスッラがカッパドキア以外で軍事行動を展開したとは伝えていない。また、そもそも彼はわずかな軍勢のみしか従えていなかった。ここからDe Souzaはこの時スッラとキリキア海賊との間に戦闘があったことは考えられないと主張する。

実際、この年のスッラの行動については史料は海賊との対決について一切言及しておらず、カッパドキアにおける行動しか伝えられていない。De Souzaは彼の管轄属州については明言を避けているが、属州がどこであったにせよこの年の彼の任務は海賊討伐ではなく、カッパドキアの王位問題の解決であったと考えている[16]。

既に述べたように、アッピアノスの言説が事実面で著しく歪曲されていると疑う理由は見当たらない[17]。ここでも、De Souzaが言うように彼がキリキアで行ったことがわからず、逆にカッパドキアでの任務は明白であるとしても、それは管轄属州がキリキアと考えることを特に疑う理由にはならない。たしかにプルタルコスが言うように彼は（キリキアとならんで）属州外のカッパドキアにも送り込まれ、アリオバルザネスの復位とミトリダテースへの牽制も行ったのであろう。しかしおそらくは当時の慣行に従って３年にわたりキリキアを属州とした可能性もあるスッラの行動がむろんそれだけであったはずはない。一般的な総督としての業務以外に彼が何を行ったのか史料が全く語っておらぬ以上、結論を出すことはできない。しかし前稿で取り上げた属州キリキアの性格、特にlex de provinciis prateoriisによるこの属州の成立過程を考慮することは、ある程度の推論を可能にする。

前100年頃に導入されたと考えられるこの法は前稿で確認した通り、「ローマおよび同盟都市市民、ラテン人、ローマ人との友好関係を享受している外国の市民が安全に航行できるように」、キリキアをはじめとするいくつかの属州の形成を定めた。そして東地中海の各国の王たちに、いかなる形でも海賊に基地、港を供与しないことを要請する書簡を送ることを定めたのである[18]。これも前稿で取り上げたように、M. アントニウスが異例の命令権を伴ってキリキア海賊討伐を行った直後にこの法が導入されていることも併せ考えると、同法の成立当時、既にキリキア（だけとは言明できないがそれが注目の的であったことは疑う必要がない）の海賊の跳梁が「ローマおよび同盟都市市民、ラテン人、ローマ人との友好関係を享受している外国の市民」にとって危険と認識されており、同法が目的とする「安全な航行」とは具体的には海賊への対処であって、そのために東地中海に形成されたいくつかの属州の一つがキリキアであるということである[19]。こうした法の制定の４年後にキリキア総督として派遣された者に、海賊と直接軍事対決があったかどうかはわからぬまでも、海賊との対決ないしは少なくとも海賊への監視が任務内容として想定されていなかったと考えることの方が不自然であるように筆者には考えられる。

そしてその可能性に依って考えるならば、この時期カッパドキア王位をめぐる陰謀といった国家的な対抗関係がミトリダテースとローマとの東地中海での真の争点であって、海賊とミトリダテースの連係といった事態をローマが真剣に受け止めることはないといった考え方よりも、むしろ海賊を牽制する立場である属州キリキア総督のスッラが、史料が伝えるとおりにその海賊と連係せんとするミトリダテースが関わるカッパドキア問題をも担当したという考え方すら妥当性があるかもしれない。

このように戦争が勃発する前からキリキア海賊とミトリダテースとの連携があり、それに対抗してローマ側は行政面では未だなんらの業績も認められないがマリウスの傍らで軍事的頭角を現して

いたスッラをキリキアに派遣したという可能性は否定できない[20]。しかし、その場合でもこの時点のローマとスッラにとって、海賊の制圧がカッパドキアでの権力闘争に介入することよりも優先事項であったということを意味するとは言えまい。カッパドキア、ビテュニアそしてポントゥスの王権に対するローマの厳しい介入はその後も史料の中で再三取り上げられるように、当時のローマの東地中海における政治行動の主眼であった。その点から見ると海賊行為があり、それを討伐する動きもあったにせよ、それらを利用して東地中海への監視を強化した面が大きいという解釈は合理的なもの見える。そうした意味での政治的性格とは別に、海賊行為の被害が深刻であったかどうかは、この時期のキリキア海賊が具体的に何を行ったかを明らかにする必要があろう。カッパドキア問題に関連して、史料はその点を何も語っていない。そしてまた、この時期のスッラおよびローマ軍、ないしはカッパドキアなりその他の現地の軍事力と海賊とが戦ったという言及は一切ないのである。ミトリダテース、ローマと海賊との関わりについての具体的な情報は、前89年以降のミトリダテース戦争に関してようやく現れてくる。

### 3．ミトリダテース戦争

しかし戦闘において海賊がミトリダテースを支援したという言及がないのは、第一次ミトリダテース戦争においても同じである。上で引用したようにアッピアノスはスッラがまだローマでのマリウス、キンナL. Cornelius Cinnaとの内乱のさなかにあって、小アジアの動向に介入できない時期にミトリダテースが海賊を利用したと述べている[21]。しかし続けて彼が挙げる海賊の行為としては略奪があるのみであり、なんらかの軍事的行動や、ましてMarótiが主張するようなミトリダテースの私兵であるかのような行動は全く伝えられていない。スッラに艦隊の現地調達を命じられた彼の指揮下のクワエストル、ルクッルスL. Licinius Lucullusが「海賊に捕らえられそうになった」ので、スッラに合流するのに迂回を強いられたというアッピアノスの言葉自体は、De Souzaが言うとおり必ずしもこの海賊たちがミトリダテースに協力したことを意味していはないだろう[22]。むろん、東地中海には多様な海賊が存在したはずであるし、エジプト、キプロス、シリア、パンフィリアと各地を回って艦隊を調達したルクッルスが各地で海賊に出会う危険にさらされたとしても不思議ではない。また、この戦争中スッラが海賊に対して何らかの攻撃を加えたという言及もない。むしろルクッルスが艦隊調達中にわざわざ海賊の跳梁する海域を回避した（つまり海賊との戦闘を避けた）という言及が残っている[23]。こうした史料の状況を踏まえて、De Souzaはミトリダテースと海賊との連携という事実はなかったと主張する[24]。

第二次ミトリダテース戦争に関しては、ローマ側の司令官ムーレーナL. Licinius Murenaが、前79年のコーンスルであるイサウリクスP. Servilius Vatia Isauricusと並んで「海賊を攻撃したが、特別な成果を挙げられなかった[25]」（App. Mithr., 93）と名指しで言われている。彼らが不成功であったという記述の背後になんらかの意図的なものがあったとしても[26]、海賊を攻撃したことがわかっているイサウリクス（後述）と並んで、ムーレーナの名が挙げられていることからも、彼が海賊を攻撃する作戦を展開したということ自体は否定できない。実際キケローは彼が海賊に向けた艦隊を編成していたと述べている[27]。ただし実際にムーレーナによる海賊への攻撃がいつ、どこで行われたのか、どの程度の規模であったのかはわからない。そしてまた、この時点でも海賊の行為自体はわからない。ムーレーナは第一次ミトリダテース戦争においてスッラの指揮下にあり、スッラが帰国した後に（プラエトル格で）属州アシアに残された人物である。にもかかわらず彼がミトリダテースとの間に結ばれた「ダルダヌスの平和」（前85年）を無視して戦争を再開させた理由が、東地中海での勝利を自らの政治的野心のために利用しようとしたことであったと、史料は述べてい

る[28]。ミトリダテースに惨めな敗北を喫した彼に、スッラは戦争を中止するよう命を送ったが、それでも前81年に彼が凱旋式を挙行できた背後には内乱に勝利し、ディクタートル職にあったスッラの影響があったと考えてよいだろう[29]。キケローは『ムーレーナ弁護演説』の中で、三代続いてプラエトル職までしか達しえなかったムーレーナ家から初めて出たコーンスルである被告人ムーレーナを称賛して本人の勇敢さ、有能さとほぼ同じ分量でその父の小アジアにおける戦功を連ねている。彼はその中で息子の世代におけるムーレーナ家の政治的上昇を支えていたものの一要因が父の80年代におけるこうした小アジアでの戦績であると言明している[30]。

ムーレーナと同様、第三次ミトリダテース戦争の最初のローマ側の司令官ルクッルスも既に述べた通りに第一次ミトリダテース戦争においてクワエストルを務めており、スッラのローマ帰国時にはムーレーナ同様アシアに残された[31]。前74年のコーンスルに当選した彼は最初ガッリア・キサルピナに派遣されたが、同年の初めにキリキアに派遣されていたプロコーンスルが死去すると、キリキアを獲得した。この経緯でルクッルスは、「品位に欠け、褒められもせぬ、しかし目的にかなった方法」をとったという[32]。プロプラエトル管轄属州であるキリキアにプロコーンスルが派遣されたこと自体が注目に値するが、このことはルクッルスが最初ではない（後述）。しかし彼がキリキア担当を熱望していたことは注目に値する。ガッリア・キサルピナからキリキアへの属州の変更を彼が望んだ理由はこの属州そのものではなく、ミトリダテースとの三度目の戦争における軍の司令官を務めることにあったという[33]。そのためには「品位に欠け、褒められない方法」も辞さないほどにルクッルスはミトリダテース戦争での勝利を通しての名誉と声望の獲得を目指していたということである。

ルクッルスの行動はキリキアに限定されない。彼はミトリダテースのキジュコス包囲を失敗に終わらせた後、直接ポントゥスに進攻してシノペを占拠した[34]。その際にシノペを防衛していたクレオカレスKleolalesとセレウコスSeleukosがキリキア人であったというプルタルコスの言葉と、セレウコスを「大海賊」と呼ぶオロシウスの言葉から[35]、ミトリダテースと結んだキリキア海賊がシノペを護り、それをルクッルスが撃破したという一見無理のないシナリオは、たしかにオロシウスの史料としての性格を考慮すると簡単に受け入れるのは危険かもしれない[36]。しかしそうでなかったということも確言はできない。要するに前73年の時点で、キリキア海賊がどのような意味でどの程度ミトリダテースと共闘していたのかははっきりしないということ、そしてルクッルスが海賊をどの程度討伐したのかも現存する史料からは結論を出すことはできないということだ。

史料が明らかにしているのは、ルクッルスの戦績がこの後の彼のローマにおける声望の大きな要因となったことである[37]。ムーレーナとは異なり、彼はシノペ攻略後も大きな功績を挙げ続け、逃げるミトリダテースを追って、アルメニアまで進軍している。策を弄してまで命令権を獲得したことは彼にとって大きな政治的成果をもたらしたということだ。

この点と並んで注目すべきなのは、ルクッルスが保持した命令権の性格である。前稿で確認したとおり前102年にアントニウスが海賊制圧のために与えられた命令権はその年数と空間的な広さの点で異例であった[38]。それ以降、３年間の属州総督在任は一般的になっていたが、しかしルクッルスの東地中海における命令権は前74年から67年にまでの８年間におよぶ。そしてその適用範囲は当初の管轄属州であるキリキアからアシア、さらに新設の属州ビテュニアと事実上ポントゥスにまで及んだ[39]。つまりはミトリダテースとの戦争のために必要な空間がほぼ全域ルクッルスの命令権下に服したことになる。この時間的、空間的に異例の規模を持った命令権の範囲で彼が繰り返した戦闘が小アジア一円からミトリダテースの勢力を駆逐することに成功し、そして彼自身に上述の声望をもたらしたということになる。

三度のミトリダテース戦争に関する史料の中で、ミトリダテースと海賊、ローマと海賊の関係がこの戦争の中でどのように語られているかを見てきた。ここからはたしかにDe Souzaの主張通りミトリダテースが戦争に（あるいは戦争前のカッパドキア問題に関しても）、海賊を自らの私兵のごとく用い、ローマ軍が戦闘中で海賊の軍事力と衝突したという様相は確認しえない。つまりこの状況で海賊がミトリダテースにとってローマに対抗するための有益な軍事力として機能し、その意味でローマの東地中海進出における深刻な障碍となったなどということはないというDe Souzaの考えは妥当であるように見える。ではそれはDe Souzaが結論するように、あくまでもローマの東地中海への支配拡大とそのための障壁であったミトリダテースへの攻撃を正当化するための口実に過ぎなかったのだろうか。そうであるならば、第１章で述べた通り、当該時期に関する主史料の記述に描き出されるミトリダテース王と海賊の関わりはどんな意味を持っていることになるのだろうか。この点をさらに検討する材料をミトリダテース戦争に関する史料から引き出すことは困難である。従って、時間的、空間的に重なる時期にキリキア海賊を討伐したと言われる別のローマ人命令権者の動きを取り上げてみよう。それは上でムーレーナと共に名を挙げた、前79年のコーンスル、イサウリクスの行動である。既に見てきたように彼は当該時期に海賊討伐に着手した司令官として知られ、また命令権の性質からしてルクッルスのそれの前提とも言える人物である。イサウリクスが海賊に対して何を行い、またそれを支えた彼の命令権がいかなるものであったのかを、史料は比較的詳しく示している。

### ４．イサウリクスのキリキア海賊討伐

イサウリクスは前79年のコーンスル職の翌年、プロコーンスルとして属州キリキアに赴任した。その後前74年にローマで凱旋式を挙行するまでの５年間という異例の長さ、彼はキリキアで命令権を保持しつづけた。これは上で言及したルクッルスの異例の命令権の直前に位置するものである。

このようにイサウリクスの小アジアにおける活動は、ミトリダテースが第二次ミトリダテース戦争の終結（前82年）から、第三次ミトリダテース戦争の開戦（前74年）の間にすっぽり入っていることになる。この間、おそらく前76年であろうと考えられる年に彼はキリキアに隣接する東部リュキアでオリュンポス、ファセリス、コリュコスの三都市を制圧している。この３つの都市について、ストラボンが以下のように語っている。

> 「タウロス山脈の近くに、海賊ゼニケトスの基地がある。山と要塞は同じ名前、オリュンポスという。ここからリュキュア、パンフィリア、ピシディア、ミヤスの全体が見える。山がイサウリクスに取られたので、ゼニケトスは自分の一族と共に自らに火をかけた。また彼はコリュコスとパセリスまたパンフィリアの多くの部分も支配していたが、イサウリクスがそれら全てを制圧した[40]。（Str., 14, 5, 7）」

8 この地域はキリキアには含まれない。しかしキケローは都市ファセリスについて次のように語っている。

> 「プブリウス・セルウィリウスが占領したファセリスは、常にキリキア海賊の都市であったのではない。そこにはギリシア人であるリュキア人が住んでいた。しかしその位置と非常に遠く海上に突きだしている地理的条件のゆえに海賊がしばしばキリキアへの遠征の行き帰りにここに集結したのだ。彼らはこの都市を自分達のものにした。最初は商売を通して、ついで同盟

関係を結んで[41]。（Cic., *Verr II,* 4, 21）」

また、プルタルコスはキリキア海賊の跳梁を述べる記述の中でオリュンポスについて言及している。

「彼らはオリュンポスで外来の犠牲の儀式を執り行った[42]。（Plut. *Pomp.,* 24）」

つまりパセリス、オリュンポスにはキリキア海賊が拠点をおいており、隣接するコリュコスも同様であったと考えられる。

ミトリダテースとの戦争が小休止状態にあった時期でのキリキア海賊への攻撃の理由はなんであったのだろうか。ここで注目すべきであるのは、イサウリクスがプロコーンスルとしてキリキア属州を担当したことである。すでに述べてきたように属州キリキアはプロプラエトル担当の属州として創設され、実際わかっている限りここにはプロプラエトルが着任してきた[43]。戦争が曲がりなりにも終結し、ポントゥス軍との戦闘が想定できないこの時期にプロプラエトルよりも上位の命令権を備えてプロコーンスルのイサウリクスが着任したことはその命令権の長さと並んで異例であり、そこにはなんらかの理由があったと考えるべきであろう。

一つの理由は一般に認められている通り、ミトリダテースとの講和がなったとはいえ小アジアの情勢は未だ不安定であり、ローマとミトリダテースとの間に再び戦火が起こることが想定されていたからであろう。前83年にはシュリアがアルメニアによって占拠されたがアルメニア王ティグラネスTigranesはミトリダテースの女婿である[44]。また前79年にカッパドキア王アリオバルザネスがローマ元老院にミトリダテースの干渉を非難する使者を送った。この時点で元老院を事実上支配していたスッラは、ミトリダテースにカッパドキアを諦め、前84年の「ダルダネスの和約」を遵守するよう指示する使者を送り、ミトリダテースはこれに従うことをスッラに伝える使者を送った。が、その使者が到着する前にスッラは死去した[45]。

イサウリクスはおそらく前90年にプラエトルを務め、前88年にスッラの支援によって凱旋式を挙行している。この理由はわからないが、少なくともこの前の時点でなんらかの軍功を挙げた可能性は大きい[46]。そして翌87年のコーンスル選挙に立候補したが、スッラの政敵キンナに敗れたらしい。前88年にはキンナ派の軍と戦って勝利している[47]。以上から見て、イサウリクスは軍事面での功績が行政面に先行する人物であるように考えられる。そしてまた、スッラに近しい政治的立場にあったと考えられそうである。前80年代後半の内乱を経緯と、その後のスッラの独裁体制を考えても、前79年のコーンスル当選がスッラとの良好な関係の継続を前提としていると考えてよいだろう。

おそらくスッラはミトリダテースを牽制し、前84年に自分が打ち立てた「和約」の内容を継続させようと望んでいた。換言すれば彼が望んでいたのは自分がもたらした小アジアにおける秩序の維持であり、ミトリダテースとの間に再び戦火を交えることではなかったということになろう[48]。その彼の意向を受けたイサウリクスが属州キリキアに派遣された。スッラは死去したが、ミトリダテースはその後もしばらくローマと直接対決する姿勢を見せない。

プロコーンスルであるイサウリクスのキリキア着任と現地での行動は、こうしたスッラ支配下の、そしてその死の直後のローマとミトリダテースとの小アジアをめぐる関係の中に位置づけられそうである。

だがその場合、次の点をどう理解すればよいのだろうか。すなわち少なくとも当初はミトリダテ

ースと戦火を交えることはなく、ただ彼を牽制することを目的としてキリキアに入ったのであろうイサウリクスが最初に行ったことが、キリキア海賊の拠点を叩くことであったという事実の意味である。

De Souzaが主張するようにミトリダテースとキリキア（あるいは他の地方出身でもありえる）海賊との間に協力関係がなかったとしたら、イサウリクスの行動の理由は説明がつかない。De Souzaはこの東リュキアの海賊とストラボンに呼ばれるゼニケトスなる人物がそもそも海賊ではなく在地の有力者だったという可能性を示唆するが、その解釈は謂わば状況証拠に依拠したものである[49]。このできごとに関する史料の全体的な不足という状況にあって、筆者もそのような解釈自体を否定するものではないが、しかしこの時期に南アナトリア地方で軍事行動を行うことを正当化するためにゼニケトスらに海賊というレッテルを貼ったという説明よりは、南アナトリアでの軍事行動の理由がミトリダテースと協力関係にあった者達を叩き、王を牽制することにあったという説明の方が、より蓋然性を持つのではなかろうか。あるいはより精確に言うならば、ゼニケトスを「海賊」と呼んだのはローマ人にもかもしれないが、だからといってゼニケトス等の行動がミトリダテースに協力し、ローマに敵対するものでなかったとは言えない（後述）。

そうであるならば、さらなる問いが生じてくる。もし海賊とミトリダテースがやはり協力関係にあったとしても、ここまで確認してきたとおり戦争中に海賊がミトリダテースの軍事行動を支援したということを明確に示す史料はなにもない。だとすれば、ミトリダテースへの海賊の協力とはどのようなものであったのだろうか。

ここで主史料の報告内容を改めて考えてみよう。既に第１章で引用したアッピアノス、プルタルコスの言説に示される、海賊の行為は船舶の攻撃と略奪である。またこれらに続く文では海賊が都市、神域の攻撃、破壊、略奪をくり返し、人々を（とりわけローマ人を）誘拐して身代金を奪ったり殺害したりする様相が描かれている[50]。Marótiをはじめとする定説も、De Souzaも共に、地中海一円において古くから怖れられ、蔑まれていたこの種の略奪・破壊・誘拐行為ではなく、私兵的な行為が海賊によってミトリダテースのために提供されたか否かという点を中心に議論を進め、その結果、De Souzaはそのような行為を史料から認めることはできないと結論するのだが、そうした前提を離れ、史料が描くとおりに海賊が略奪・破壊・誘拐行為という形でミトリダテースへの協力を行っていたという可能性を再考してみる必要があるように筆者には思われる。

そこで注目せねばならないのは、第１章で引用したアッピアノスの一文である。

> 「豊かな略奪品に味をしめ、ミトリダテースが敗北して和平を結び、条約を再び結んだ後も行為をやめなかった[51]。」

これは第一次ミトリダテース戦争でスッラとミトリダテースとが「ダルダネスの和約」を結んだ（前84年）後の状況を指している。その直後に勃発した第二次ミトリダテース戦争は上述の通り短期間しか継続せず、結局「ダルダネスの和約」の再確認で終わっているので、ここでアッピアノスが描く海賊行為の拡大はその後の時期をも含めると考えてよいだろう。つまりは第二次ミトリダテース戦争と第三次ミトリダテース戦争の間であり、イサウリクスがキリキアに派遣された時期と一致する。このことがプロプラエトル管轄の属州キリキアにプロコーンスルであるイサウリクスが派遣されたもう一つの理由ではないだろうか。アッピアノスは上に引用した文章で、ミトリダテースが敗北してローマと和約を結んでも海賊が略奪をやめなかったと述べるが、そのことに対するミトリダテースの意向はむろんこの記述からはわからない。わかるのは、王自身が「和約」に基づいて

ローマ人を攻撃しないという姿勢を堅持してみせていた一方で、海賊は戦時におそらく王へ協力して行っていた略奪行為を継続、拡大していたということである。こうした前70年代初頭の状況下で、ミトリダテースとローマとの関係が悪化しつつある中、（王の意向が明らかでないとしても）王と海賊との間に戦時と同じ協力関係があるとローマ側が受け取ったとしても、不自然ではなかろう。イサウリクスのキリキア海賊攻略はこうしたローマ側の理解を踏まえた上での王への牽制の意味を持っていたと考えることは、少なくともDe Souzaの解釈よりは史料が伝える状況と適合している。

キケローはキリキア海賊を攻めたイサウリクスが多くの海賊を捕虜とし、晒し者にした後処刑したことを再三取り上げている。

> 「たった一人でプブリウス・セルウィリウス（イサウリクス：筆者註）は彼以前の誰よりも多くの海賊を生け捕りにした。その彼が捕らえられた海賊を見る喜びを誰かに対して拒んだことがあっただろうか？　反対に彼は鎖につながれた敵をさまざまな方法で晒す非常に楽しみな見世物をもたらした。そのため海賊が連れてこられた街の住民だけでなく、あらゆる場所から人々が集まってきたほどだ。彼の凱旋式がローマ市民にとって全ての凱旋の中で最も喜ばしく楽しみであったのはなぜか？　それは勝利より甘美なものはなく、しばしばおそれをもたらした者達が打ち負かされ処刑の場に引き立てられるのを見ることほど勝利の確証になるものはないからだ[52]。（Cic., *Verr.II,* 5, 66）

凱旋式において敵を晒し、処刑することは一般的な慣行である。しかしイサウリクスの海賊へのこうした対処は、キケローによるウェッレースの不正を糾弾するための誇張を差し引いても、「彼以前の他の誰よりも」という表現からしてキリキア海賊に対する従来以上に厳しい姿勢が見える。ここには、海賊の行動が激しさを増していたという事態を背景に、それ自体を制圧する必要性とならんですでにローマへの三度目の戦端を開くことが誰の目にも明らかになっていたミトリダテースへの強い牽制の必要があったことがうかがわれるのではないだろうか。

イサウリクスが在任中にミトリダテースへの牽制のみを視野に入れ、あくまでもスッラの秩序を維持しようとしたのかどうかはわからない。少なくともムーレーナのように本国の意向を踏みにじって自ら戦端を開く気はなかったようだ。東リュキア攻略後の彼の行動ははっきりとはわからない。どうやらその作戦は海賊攻略とは異なる方向へ向い、前76年から75年にかけてパンフィリア内陸部のイサウリア人、オロンデース人を制圧し、前75年の末か前74年初頭にイタリアに帰還しているようだ。彼のこの勝利は凱旋式とイサウリクスというその添え名、そして4年後のウェッレース弾劾演説の中でキケローがくり返し触れるその高い声望を彼にもたらした[53]。

後半の内陸部での軍事行動は何を意味しているのだろうか。もはやミトリダテースを牽制するだけでは終わらず、目前に迫っている再びの戦争のための軍事的前哨地を得ておくことがこの時点での彼の念頭にあったのではなかろうか[54]。

11

## 終わりに

前1世紀前半の東地中海における海賊の行動がいかなる意味を持っているのか、海賊の行動を伝える史料を通して、そこで関連づけられているポントゥス王ミトリダテースとローマとの対立を軸に検討してきた。カッパドキア問題、三度の戦争、イサウリクスの海賊討伐から見える海賊とミトリダテース、そしてローマとの関わりを改めて整理しておこう。その上で、これらの局面での海賊問題がローマにとっていかなる意味で政治的と考えられえるのかという点を、「はじめに」冒頭で

整理した三点に関して考察したい。

第１に、すべての局面でローマがミトリダテースの不正義を示すために海賊問題を利用した可能性が大きいと言える。カッパドキア問題でも、戦争中でも、イサウリクスの作戦においてもローマ側のこうした姿勢が史料中に表れており、この点に関してはDe Souzaの主張が説得力を持つ。従って、「はじめに」冒頭の整理に従えば海賊問題は前２世紀末から引き続きローマにとって、①の意味での政治性を備えていたと言ってよいだろう。

第２に、ミトリダテースとの戦いはローマ軍の司令官に政治的声望をもたらす可能性があったことがわかる。ムーレーナとルクッルスが命令権の獲得、保持と戦争の遂行をいかに強く望んでいたのかという点はこのことを明確に示している。そしてまた、ルクッルスとイサウリクスの命令権が従来のそれから時間的、空間的に大きく拡大された異例のものであることも注目に値する。彼らはこの巨大な権力を小アジア周辺で保持、行使し、帰国後にはその権力を行使した成果を政治的に、あるいは社会的に十二分に利用した。この点に付説するならば、ムーレーナ、ルクッルス、イサウリクスが皆スッラの身辺にあった者達であるという点も看過できまい。前84年に小アジアの新秩序を打ち立てたスッラの意向がこれら命令権者たちの背後にあり、それゆえにまた彼らの戦績はローマにおいて声望を約束されていたのではなかろうか[55]。

問題は、この状況と海賊問題との関わりであろう。繰り返しになるが、De Souzaはミトリダテース戦争と海賊との間にローマの反応を呼ぶほどの協力関係を認めない。しかしそれは、史料からは海賊がミトリダテースの私兵的行動を起こしていることが認められないという点を根拠としている。これに対して筆者は前章において、ミトリダテースと海賊との協力は私兵的なものではなく、あくまでも史料が語るとおりに略奪・破壊・誘拐といった面に限定されていたという考えを示した。この前提に立つと、ミトリダテースとローマ軍との戦いはローマ軍と海賊との戦いも含んでいる可能性は否定できない。実際、上でみてきたように、イサウリクスだけではなくムーレーナ、ルクッルスも詳細は不明であるが海賊を攻撃した（あるいはしようとした）こと自体は史料が語っているのである。すなわちローマの命令権者たちはミトリダテースとの戦いとそれに伴う海賊との戦いによって戦功をたて、政治的声望を得ることを望んでいた。そして実際にルクッルスとイサウリクスはローマ元老院が認めた異例の命令権を行使して戦功を挙げて凱旋式を挙行し、政治的、社会的な声望を獲得したのである（ムーレーナにいたっては敗北したにも拘わらず凱旋式を挙行した）。このように、「はじめに」で整理した②の意味での政治性もまたここに認められるが、それは前１世紀前半の状況は前２世紀末のアントニウスの時代よりも顕著になっている。つまり命令権（それはこの時期になるとくり返しの異例の命令権の出現をも伴う）を保持、行使する特定の個人が政治的優位を獲得する可能性とそれを熱望する姿勢がこの時期にははるかに拡大しているということである。

しかし、この理解は当然次の二つの疑問をもたらすことになる。まず、海賊が略奪・破壊・誘拐といった犯罪的行為でミトリダテースの対ローマ戦略を後方支援していたとすると、このような方法は果たして当時の東地中海におけるミトリダテースの立場にとって益となるかという疑問がある。De Souzaが入念に整理しているように、東地中海では古くから海賊の被害があり、各地の住民にとって海賊は恐怖と憎悪の対象として描かれている[56]。しかしこうした海賊への反感と憎悪はまさにDe Souzaが描き出すとおり、それが誰にとっての攻撃、被害であるかによって「海賊」と呼ばれるかが決まる類いのものである[57]。第１章で認めたように、ミトリダテースについてネガティブな像のみを語るローマ側史料しか我々には残されていない。それらが語るできごとはおそらくその大半が実際にある程度「あった」と認めてよいだろう。ではそこでミトリダテースに協力し、ローマ人、あるいはローマの同盟者、服属者を攻撃、略奪する者達は何者だったのか。史料は彼ら

12

を「海賊」と呼び、憎むべき存在とし、キケローが述べるごとく人外の者とすら見なす[58]。が、ミトリダテース側あるいは東地中海におけるローマの同盟者、服属者以外の現地住民にとって彼らは「海賊」ではなく、進出の度合いを増すローマ人に対して懲らしめをもたらす痛快な存在だったのではなかろうか。そしてそのような「英雄」とは言わぬまでも「義賊」と言っても大過ない者たちがミトリダテースを支援したとしても、それは東地中海で王の評価を傷つけることにはならなかったのではあるまいか[59]。

前１世紀前半の東地中海における勢力をめぐるミトリダテースとローマとの闘争の中で、海賊はミトリダテースと協力しローマに対する一種の攪乱作戦を展開した[60]。ローマ側にとってはこれは深刻な問題であり、かつあくまでも犯罪であり、悪である。それゆえにローマは東地中海一円において海賊と結んだ悪しき王というミトリダテース像をばらまき、自らの軍事行動を正当化せねばならなかった。この意味において上で確認した①は認められるものと筆者は考える。したがって背後の状況は前稿で見た前２世紀末の状況よりもはるかにローマの対外関係にとって切迫し、危険なものであったと言わねばならない。それゆえにこの状況を好転させるためにローマの命令権者は異例の命令権を獲得、行使し、自らの政治的声望を獲得しようとした。この意味で②が伴うのである。

さすればここに最後の疑問が立ち現れる。それほどに海賊の略奪・破壊・誘拐といった犯罪的行為はローマにとって深刻な被害をもたらしたのであろうか、という疑問である。深刻でなければ、ローマ側はそれほど真剣に対処しなかったであろうし、そのために異例の命令権を認めることもなかったかもしれない。また深刻であったからこそ、これを解決することは政治的な声望を意味したであろう。つまりは「はじめに」で挙げた③の意味での政治性が前１世紀前半の海賊問題にあるのか否かということになる。そしてまた、もし深刻であったのなら、それはどのような面で、なぜ深刻であったのかということも問われるべきである。この点の考察のためには海賊による上述の犯罪的行為が当時のローマ人を含む地中海住民にいかなる被害をもたらしたのか、その内実を詳しく知る必要が生じる。それに関連して、最後に上で引用したアッピアノスの文言を再度思い出しておきたい。

> 「こうして非常に短期間に彼らは数万人に膨れあがった。今や東地中海のみではなくヘラクレスの柱までの地中海全体を彼らは支配した。そして海上勤務中のローマの将軍たちやシチリア島沿岸においてシチリア在任中のプラエトルまでに打ち勝った。海上はどこも安全な航行が不可能となり、陸上も商取引に適さなくなった。都市ローマはこの害悪をもっとも直接的に蒙った。ローマに従う者たちも苦しめられたが、ローマ自体の住民はゆゆしい飢餓に悩まされたのである[61]。」

この状況も第一次ミトリダテース戦争終結後の状況を示している。海賊は今や東地中海のみならず西地中海にまで勢力を拡大し、猛威をふるった。このためローマの政務官までもが被害を蒙ったが、なによりも商取引が阻害され飢饉が襲ったという。この状況は「はじめに」末尾で確認した、前１世紀前半の海賊問題と共に語られる二つの問題、すなわち西地中海の状況と食糧不足とに結びついている。この二つの問題に立ち入りつつ、前１世紀前半の海賊問題がローマにとっていかなる意味において政治的であるのかを問うことが次なる作業となるが、その結果は次稿に譲りたい。

13

## 註

1．De Souza, Ph., *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge, N.Y., 1999.

2．宮嵜麻子「ローマ共和政の政治問題としての海賊（１）：前２世紀末の状況」『国際経営・文化研究』第18-2号、2014、p.83.

3．特にCic., *Leg. Man.,* 34-35; Liv., *Per.,* 99; App., *Mithr.,* 94-96; Plut., *Pomp.,* 24-28.

4．当該時期の食糧問題については、Garnsey, P. D., *Famine and Food Supply in the Graeco-Roman World,* Cambridge, 1988, pp.198ff.; Rickman, G., *The Corn Supply of the Ancient Rome,* Oxford, 1980, pp.48ff. 宮嵜麻子『ローマ帝国の食糧供給と政治：共和政から帝政へ』九州大学出版会、2011、pp.148ff.

5．ミトリダテース戦争とローマの東地中海進出の関係を本格的に扱う研究として、ひとまず以下の文献を挙げておく。Hinde, J. G., Mitridates, in *the Cambridge Ancient History,* vol.9, 2nd ed., Cambridge, 1994, pp.130ff.; Ferarry, J-L., Rome, les Balkans, la Grèce et I'Orient au IIe siècle avant J-C., in Nicolet, C. (ed.), tom.1, *Rome et la conquiète du monde méditerranéen* (*Nouvelle Clio,*), Paris, 1978, pp.729ff.; Kallet-Marx, R., *Hegemony to Empire: The Development of the Roman Imperium in the East from 148 to 62 B.C.,* Berkeley/ Los Angeles/ Oxford, 1995, pp..239ff. 田村孝「ヘレニズム土着王国の反撃：ポントゥス王ミトリダテス６世の場合」本村凌二他編『地中海世界と古典文明』前1500年～後４世紀』岩波講座世界史第４巻、1998、pp.231ff.; 同「ローマ帝国の拡大と王たちの抵抗：ナビスとミトリダテス」森谷公俊他編『古代地中世界の統一と変容』青木書店、2000、pp.117ff.

6．« καὶ λῃστήρια πολλὰ ἀνά τε γῆν καὶ θάλασσαν.»

7．« Ἡ. γὰρ πειρατικὴ δύναμις ὡρμήθη μὲν ἐκ Κιλικίας τὸ πρώτον, ἀρχὴν παράβολον λαβοῦσα καὶ λανθάνουσαν, φρόνημα δὲ καὶ τόλμαν ἔσχεν ἐν τῷ Μιθριδατικῷ πολέμῳ, χρήσασα ταῖς βασιλικαῖς ὑπηρεσίαις ἑαυτήν.»

8．« Μιθριδάτης ὅτε πρῶτον Ῥωμαίοις ἐπολέμει καὶ τῆς Ἀσίας ἐκράτει, Σύλλα περὶ τὴν Ἑλλάδα πονουμένου, ἡγούμενος οὐκ ἐς πολὺ καθέζειν τῆς Ἀσίας, τά τε ἄλλα, ὥς μοι προείρηται, πάντα ἐλυμαίνετο, καὶ ἐς τὴν θαλάσσαν πειρατὰς καθῆκεν, οἳ τὸ μὲν πρῶτον ὀλίγοις σκάφεσι καὶ μικροὶς οἷα λῃσταὶ περιπλέοντες ἐλύπουν, ὡς δὲ ὁ πόλεμος ἐμηκύνετο, πλέονες εγίγνοντο καὶ ναυσὶ μεγάλαις ἐπέπλεον. γευσάμενοι δὲ κερδῶν μεγάλων, οὐδ᾽ ἡττωμένου καὶ σπενδομενοῦ τοῦ Μιθριδάτου καὶ ἀναχωροῦντος ἔτι ἐπαύοντό οἱ γὰρ βίου καὶ πατρίδων διὰ τὸν πόλεμου ἀφῃρημένοι, καὶ ἐς ἀπορίαν ἐμπεσόντες ἀθρόαν, ἀντὶ τῆς γῆς ἐκαρποῦντο τὴν θάλασσαν, μυοπάρωσι πρῶτον καὶ ἡμιολίαις, εἶτα δικρότοις καὶ τριήρεσι κατὰ μέρη περιπλέοντες, ἡγουμένων λῃσταρχων οἷα πολέμου στρατμγῶν. »

9．« ὥστε πολλαὶ τάχιστα αὐτῶν μυριάδες ἧσαί, καὶ οὐ μόνης ἔτι τῆς ἕῳας θαλάσσης ἐκράτουν, ἀλλὰ καὶ τῆς ἐντὸς Ἡρακλείων στηλῶν ἁπασης᾽ καὶ γάρ τινας ἤδη Ῥωμαίων στρατηγοὺς ναυμαχίᾳ ἐνενικήκεσαν, ἄλλους τε καὶ τὸν τῆς Σικελίας περὶ αὐτῇ Σικελία. Απλωτά τε ἤδη πάντα ἦν, καὶ ἡ γῆ τῶν ἔργων ἐνδεὴς διὰ τὴν ἀνεπιμιζίαν .ἥ τε πόλις ἡ Ῥομαίων ᾕσθετο μάλιστα τοῦ κακοῦ, τῶν τε ὑπηκόων σφίσι καμνόντων, καὶ αυτοι διὰ πλῆθος ἴδιου επιπόνως λιμώττοντες. »

10．Maróti, E., Die Rolle der Seeräuber in der Zeit des Mithridatisschen Krieges, in *Richerche storiche ed economiche in memoria de Corrado Barbagallo,* a cura di Luigi de Rosa, vol.1, Napoli, 1970, pp.479ff.

11．De Souza, Ph,. *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, pp.117f.; pp.122f. 特にpp.132f.

12．Op.cit., p.117; p.132.

14

13．Μετὰ δὲ τὴν στρατεφίαν "εἰς τὴν Καππαδοκίαν ἀποστέλλεται, τὸν ηὲν ἐμφανῆ λόγον ἔχων πρὸς τὴν στορατείαν Ἀριοβάρζάνην καταγαγεῖν, αἰτίαν δὲ ἀληθῆ Μιθριδάτην ἐπισχεῖν πολυραγμονοῦντα καὶ περιβαλλὸμενον ἀρχὴν καὶ δύναμιν οὐκ ἐλάττονα τῆς ὑπαρχούσης »

14．このできごとの意味に関しては、Kallet-Marx, R., *Hegemony to Empire: The Development of the Roman Imperium in the East from 148 to 62 B.C.,* Berkeley/ Los Angeles/ Oxford, 1995, pp.242ff.; Keaveney, A., *Sulla: The Last Republican,* 2nd.ed., Oxford/N.Y., 2005. pp.30ff.; Santangelo, F., Sulla, the *Elites and the Empire: A Study of Roman Politics in Italy and the Greek East,* Leiden/Boston, 2007, pp.25ff.

15. « ἐς μὲν Καππαδοκίαν ἐγὼ κατήγαγον Ἀπιοβαρζάνην Κιλικίας ἄρχων, ὧδε Ῥωμαίων ψηφισαμένων καὶ σὺ κατήκουες ἡμῶν,»
16. Plut., *Sull.,* 5. De Souza, Ph., *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, p.115.
17. このことはむろん、アッピアノスの言説がすべて精確であるという意味ではない。明らかに彼の（そして他の主史料もまた）伝える内容には誤りも含まれる。明白な事例を一つあげるならば、後述するようにイサウリクスがムーレーナの後任であるといった誤り（App., *Mithr.,* 93.）。Cf. Kallet-Marx, R., *Hegemony to Empire: The Development of the Roman Imperium in the East from 148 to 62 B.C.,* Berkeley/ Los Angeles/ Oxford, 1995, p.251.しかしなお、アッピアノスの言説全体を疑う必要はない。
18. Hassall, M., Crawford, M. and Reynolds, J. M., Rome and the Eastern Provinces at the End of the Second Century B.C., in *JRS.* 64, 1974, pp.201ff. Cf., Sherwin-White, S. M., *Roman Foreign Policy in the East,* London, 1984, pp.97ff.
19. 宮嵜麻子「ローマ共和政の政治問題としての海賊（１）：前２世紀末の状況」『国際経営・文化研究』第18-2、2014、p.84.
20. 彼のこの時点までの軍事面での業績については改めて言及するまでもないが、Sall., *Iug.,* 96; Plut., *Sull.,* 3-4; 5.を主史料として挙げておく。スッラの政務官としての経歴についてはPlut., *Sull.,* 5. Keaveney, A., *Sulla: The Last Republican,* 2nd.ed., Oxford/N.Y., 2005, pp.29f. Cf. Santangelo, F., *Sulla, the Elites and the Empire: A Study of Roman Politics in Italy and the Greek East,* Leiden/Boston, 2007,p.26
21. App., *Mithr.,* 92.
22. App., *Mithr,* 37; 56; Plut. *Luc.,* 2, 5. De Souza, Ph., *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, p.119.
23. Plut., *Luc.,* 3, « επεὶ δὲ πλῆθος ἐν παράπλῳ νεῶν ἐκ τῶν παραλίων πόλεων ἀθροίσας, πλὴν ὅσοι πειρατικῶν μετέιχον ἀδικημάτων»「彼はあちこちを航海して、海賊と結んでいるものを除く沿岸の諸都市から多くの船を集めた。」
24. De Souza, Ph,. *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, p.119.
25. « Μουρήνας τε εγχειρήσας αὐτοῖς οὐδὲν εζείργαστο μεγα.»
26. De Souza, Ph., *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, p.122.
27. Cic., *Verr. II.* 1, 89-90. “in ea classe quae contra piratas aedificata sit”「海賊に対して建造されたあの艦隊において」。
28. App., *Mithr.,* 64-65. スッラの命令権下ののでのムーレーナの戦績については、Plut., *Sull.,* 18-19.
29. App., *Mithr,* 66; Cic., *Leg. Man.,* 8; *Mur.,* 11; 15. この年にはスッラ自身もミトリダテースへの勝利を祝う凱旋式を挙行している。Plut., *Sull.,* 34.
30. Cic., *Mur.,* 11; 12; 特に15：“Sin autem sunt amplae et honestae familiae plebeiae, et proavus L. Murenae et avus praetor fuit, et pater, cum amplissime atque honestissime ex praetura triumphasset, hoc faciliorem huic gradum consulatus adipiscendi reliquit quod is iam patri debitus a filio petebatur.”「もし立派で尊敬すべき平民家系があるなら、ルキウス・ムーレーナの曾祖父と祖父はプラエトルであった。父はプラエトル権限によって非常に輝かしい、立派な凱旋式を挙行した。そして被告がコーンスル職に立候補するのを助けた。父君自身コーンスル職を目指せたのだが、息子が立候補を目指したので譲ったのである。」しかしそのキケローといえども、ムーレーナの不成功を糊塗することはできない。Cic., *Mur.,* 32.
31. しかし第一次ミトリダテース戦争に参戦する以前からスッラはルクッルスの才能を称賛し、目に掛けていたという。Plut., Luc., 2.
32. Plut., *Luc.,* 6. « καὶ τελευτῶν ἔργον οὐ σεμνὸν οὐδ᾽ ἐπαινετόν, ἄλλως δ᾽ ἀνύσιμον πρὸς τὸ τέλος ἐκ τῆνς ἀνάγκης ὑπέμεινε παρὰ τὴν ἑαυτοῦ φύσιν.»「とうとう自分の本来の性格を曲げて、彼は品位にも欠け、褒められもせぬ、しかし目的にかなった方法を選んだ。」具体的には女性を用いて元老院で指導的発言力を持っていた人物を懐柔し

たのである。ルクッルスのキリキア派遣の年代については論争がある。Broughton, T. R. S., *The Magistrates of the Roman Republic,* vol. 2, rep., Chico, 1984, pp.106ff.

33. Plut., *Luc.*, 6.
34. ルクッルスの戦闘全体については、Plut., *Luc.*,7-36; App., *Mithr.* 72-90.
35. Plut., *Luc.*, 23, 2 « δὲ τοὺς κατέχοντας αὐτὴν βασιλικοὺς Κίλικας»「王のために（シノペを）占拠していたキリキア人を」（括弧内は筆者の補足）; Oros., 6, 3, 2. しかしStr.,12, 3, 11.
36. De Souza, Ph., *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999,p.126.
37. Cic., *Mur.,* 20; 33; 36.
38. 宮嵜麻子「ローマ共和政の政治問題としての海賊（１）：前２世紀末の状況」『国際経営・文化研究』第18-2号、2014、p.82; cf. pp.85f.
39. Liv., *Per.,* 95. T. R. S., *The Magistrates of the Roman Republic,* vol. 2, rep., Chico, 1984, p.118.
40. « κατὰ δὲ τὰς ἀκρωρείας τοῦ Ταύρου τὸ Ζηνικέτου πειρατήριόν ἐστιν ὁ Ὀλυμνπος ὄρος τε καὶ φρούριον ὁμὼνυνον, ἀφ᾽ οὗ κατοπτεύεται πᾶσα Λυκία καὶ Παμφυλία καὶ Πισιδία καὶ Μιλυάς ἁλόντος: δὲ τοῦ ὄρους ὑπὸ τοῦ Ισαυρνκοῦ, ἐνέπρησεν ἑαυτὸν πανοίκιον. τούτου δ᾽ ἦν καὶ ὁ Κώρυοκος καὶ ἡ Φάσηλις καὶ πολλὰ τῶν Παμφύλωον χωριά: πάντα δ᾽ εἶλεν ὁ ᾽Ισαυρικός»
41. “Phaselis illa, quam cepit P. Servilius, non fuerat urbs antea Cilicum atque praedonum; Lycii illam, Graeci homines, incolebant. Sed quod erat eius modi loco atque ita proiecta in altum ut et exeuntes e Cicilia praedones saepe ad eam necessario devenirent, et, cum se ex hisce locis reciperent, eodem deferrentur, adsciverunt sibi illud oppidum piratae primo commercio, deinde etiam societate.”
42. « ζένας δὲ θυσίας ἔθυον αὐτοὶ τὰς ἐν Ὀλὺμπῳ.»。またキケローはイサウリクスがオリュンポスから莫大な戦利品を得て、それを国庫に納めたと伝えている。Cic., *Verr. II,* 1, 56-57.
43. Broughtonは前81年のコーンスル、ドラーベッラが翌前80年以降プロコーンスルとしてキリキアを管轄したとしており、De Souza, Ph., もこれに従っている。T. R. S., *The Magistrates of the Roman Republic,* vol. 2, rep., Chico, 1984, p.74; p.80; p.86;89. De Souza,. *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, p.124. しかしこれは同じ前81年にプラエトルであった同名のドラーベッラとの混同であろう。Kallet-Marx, R., *Hegemony to Empire: The Development of the Roman Imperium in the East from 148 to 62 B.C.,* Berkeley/ Los Angeles/ Oxford, 1995, p.293, n.5. Keaveney, A., *Sulla: The Last Republican,* 2nd.ed., Oxford/N.Y., 2005, p.117; p.122; p.164; p.170. Santangelo, F., *Sulla, the Elites and the Empire: A Study of Roman Politics in Italy and the Greek East,* Leiden/Boston, 2007, p.31; p.47.キケローの『ウェッレース弾劾演説』ではこのドラーベッラが多く言及されているが、そこでもこの二人の人物を同定する決定的な手がかりはない。従って筆者はこの人物を最初の属州キリキアを担当したプロコーンスルとは認めず、イサウリクスを最初の属州キリキア担当のプロコーンスルと考える。初めてプロコーンスルがキリキアに派遣さた前78年には、もう一人のプロコーンスルも東地中海に派遣されている。このことの重要性については、Kallet-Marx, R., *Hegemony to Empire: The Development of the Roman Imperium in the East from 148 to 62 B.C.,* Berkeley/ Los Angeles/ Oxford, 1995, p.293本文およびn.5.

16

44. Plut., *Luc.,* 21; *Pomp.,* 28; App., *Syr.,* 48;70; Dio, 36, 37, 6; Justin., 40, 1, 3.
45. App., *Mithr.,* 67.
46. T. R. S., *The Magistrates of the Roman Republic,* vol. 2, rep., Chico, 1984, p.43.彼はイサウリクスの凱旋式の理由がサルディニアかキリキアでの戦績と考えている。もしキリキアであるならば、イサウリクスとキリキアの関わりがこの頃からあったことになる。しかしこの推測の根拠は薄弱。
47. Plut., *Sull.,* 10. *RE.* “Servilius” Nr.93.
48. Santangelo, F., *Sulla, the Elites and the Empire: A Study of Roman Politics in Italy and the Greek East,* Leiden/Boston,

2007, pp.119f.

49. De Souza, Ph., *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, p.135.

50. App., *Mithr.* 92–93; Plut., *Pomp.,* 24.

51. App., *Mithr.,* 92.

52. "Vnus pluris praedonum duces vivos cepit P. Servilius quam omnes antea. Ecquando igitur isto fructu quisquam caruit, ut videre piratam captum non liceret? At contra, quacumque iter fecit, hoc iucundissimum spectaculum omnibus vinctorum captorumque hostium praebebat; itaque ei concursus fiebat undique ut non modo ex iis oppidis qua ducebantur sed etiam ex finitimis visendi causa convenirent. Ipse autem triumphus quam ob rem omnium triumphorum gratissimus populo Romano fuit et iucundissimus? Quia nihil est victoria dulcius, nullum est autem testimonium victoriae certius quam, quos saepe metueris, eos te vinctos ad supplicium duci videre." 他にもCic., *Verr.* II, 1, 56.

53. De Souza, Ph., *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, p.128; pp.130f. Cic., Verr. II, 1, 56; 3, 210; 4, 82; 5, 66.

54. De Souzaは後任のルクッルスの作戦行動から考えて、イサウリクスの内陸攻略には前哨地獲得の意味はないと見なしてはいるが。De Souza, Ph., *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, p.131.

55. この点は、当時のローマ人有力者の命令権獲得による政治的声望の追求という傾向は決して個人の力量のみで理解されえるものではなく、政治的人間関係や党派関係の中で理解されるべきであることを示している。しかしムーレーナ、ルクッルス、イサウリクス等の政治的上昇におけるこの側面については本稿では立ち入ることはできない。

56. De Souza, Ph,. *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999, p.2; p.38; p.89. p.94 et passim.

57. Op.cit., p.1f.; p.87; p.90; p.94f. et passim. 特にp.135. プルタルコスが語る、ポンペイウスに帰順する「キリキア海賊」たちの「本性」に関する記述はこうした側面の片鱗を物語っているのかもしれない。Plut., *Pomp.,* 28.

58. Cic., *Off.,* 3, 107.

59. この見方は、前稿「はじめに」で整理した西洋世界における海賊のイメージ形成の問題と結びつくかもしれない。別の機会に考察したい。

60. 当然、なぜ海賊はミトリダテースに協力したのか、という点が問われなければならないが、この問題もここで論じる余裕はない。一つの伝統的な見方として、ルービンゾーン、W. Z.,（田村孝訳）「ミトリダテス6世エウパトル＝ディオニソス── ローマの秩序の敵なのか犠牲者なのか？── 」『躍動する古代ローマ世界：支配と解放運動をめぐって』（理想社、200）、pp.49–99を挙げておくにとどめる。

61. App., *Mithr.,* 93.

## 参考文献表

Broughton, T. R. S., *The Magistrates of the Roman Republic,* vol. 2, rep., Chico, 1984

De Souza, Ph., *Piracy in the Greco-Roman World,* Cambridge/N.Y., 1999

Ferarry, J-L., Rome, les Balkans, la Grèce et l'Orient au IIe siècle avant J-C., in Nicolet, C. (ed.), tom.1, *Rome et la conquiète du monde méditerranéen* (*Nouvelle Clio,*), Paris, 1978

Garnsey, P., D., *Famine and Food Supply in the Graeco-Roman World,* Cambridge, 1988

Hassall, M., Crawford, M. and Reynolds, J. M., Rome and the Eastern Provinces at the End of the Second Century B.C., in *JRS.* 64, 1974

Hinde, J. G., Mitridates, in *the Cambridge Ancient History,* vol.9, 2nd ed., Cambridge, 1994

Kallet-Marx, R., *Hegemony to Empire: The Development of the Roman Imperium in the East from 148 to 62 B.C.,* Berkeley/ Los Angeles/ Oxford, 1995

Keaveney, A., *Sulla: The Last Republican,* 2nd.ed., Oxford/N.Y., 2005

Maróti, E., Die Rolle der Seeräuber in der Zeit des Mithridatisschen Krieges, in Richerche storiche ed economiche in memoria de Corrado Barbagallo, a cura di Luigi de Rosa, vol.1, Napoli, 1970

Rickman, G., The *Corn Supply of the Ancient Rome,* Oxford, 1980

Santangelo, F., *Sulla, the Elites and the Empire: A Study of Roman Politics in Italy and the Greek East,* Leiden/Boston, 2007

Sherwin-White, S. M., *Roman Foreign Policy in the East,* London, 1984

田村孝「ヘレニズム土着王国の反撃：ポントゥス王ミトリダテス６世の場合」本村凌二他編『地中海世界と古典文明』前1500年～後４世紀』岩波講座世界史第４巻、1998

同「ローマ帝国の拡大と王たちの抵抗：ナビスとミトリダテス」森谷公俊他編『古代地中世界の統一と変容』青木書店、2000

宮嵜麻子『ローマ帝国の食糧供給と政治：共和政から帝政へ』九州大学出版会、2011

同「ローマ共和政の政治問題としての海賊（１）：前２世紀末の状況」『国際経営・文化研究』第18-2号、2014

（受理　平成27年９月４日）

18